伝達表現の日英語比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高田, 花子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00054270

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

金沢大学人間社会学域経済学類
社会言語学演習『論文集』第14巻　2019年３月

伝達表現の日英語比較

経済学類４年 髙田 花子[1]

＜概　要＞
言語表現は多様であり、言語によって異なる伝え方があるというところに、各言語の特徴を捉えるヒントが隠されている。例えば、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」という川端康成の『雪国』の一節は “The train came out of the long tunnel into the snow country.”と英語に訳されている。原文には存在しない主語 the train が付け足されているということは、英語話者にはその付け足しが必要であるということである。本研究では「発話の伝達」という観点から、日英両言語の対応する表現を比較し、それぞれの言語が有する特徴の一端を探る。

＜キーワード＞
翻訳、伝達動詞、日英比較

[1] m.10esf.porson@gmail.com

＜目　次＞

1. はじめに

2. 伝達動詞とは

3. 仮説

4. 調査方法
   4.1 調査の枠組み
   4.2 使用したテクスト
   4.3 対象としての伝達動詞の定義
   4.4 作業仮説

5. 結果と結論
   5.1 英語原作
   5.2 日本語原作
   5.3 第三言語原作
   5.4 伝達動詞の種類
      5.4.1 英語原作
      5.4.2 日本語原作
      5.4.3 第三言語原作
   5.5 結果のまとめ

6. 考察
   6.1 結果を踏まえて
   6.2　Cの考察
   6.3 意味不確定動詞の共通点（Dの考察）
   6.4 仮説と異なったケースが生じる場合の考察（Bの考察）

7. おわりに

参考文献

1. はじめに

川端康成が書いた『雪国』の冒頭文は有名である。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

この一文を、エドワード・G・サイデンステッカーはつぎのように原文には存在しない主語 “the train” を付け加えて訳している（池上 2000, p. 290-293)。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

主語のない日本語原文を、英語を用いる読者に対して文法上正しく伝えるには、何か主語となるものを文頭に置かねばならない。上例のように、一つの場面を伝えるだけでも、言語が異なると表現の仕方に違いが生じてしまうことがある。しかし、翻訳においては起点言語と目標言語のそれぞれの読者はそれぞれが用いている言語で書かれた表現を読み取り、基本的に同じ内容として享受しているはずである。

しかし、英語話者が読む英語翻訳と日本語話者が読む日本語原文は、たしかに対応しているはずではあるが、はたして全く同一の事態を示していると言えるだろうか。同じ言語を用いる者同士であっても、読み取り手が違えば解釈も異なることは、一つの文学作品から複数の翻訳がなされていることから、自明の理であろう。

作品の受け取り方は読み手に任されているが、作者が意図していない誤解を避けるためにも、翻訳者は配慮して言葉を選ばなければならない。翻訳は、起点言語の内容や著者の意図を適切に伝えることが大前提でなければならない。異なった言語において原文の意図を適切に伝えるには、それぞれの言語の特徴を理解することが必要である。

本稿では、原文とその翻訳を比較することにより、日本語と英語の言語特徴を考察したい。具体的には、「発話の伝達」という観点から、両言語の表現を比較し、言語特徴を見つけていくことにする。すなわち、小説とその翻訳の対応する伝達動詞を比較する。小説であれば、登場人物の発した発話を引用する際に伝達表現が多く用いられるため、様々なデータを採取しやすいからである。そして、動詞とは別の方法で伝達を表している場合は、どのような条件で生じうるのかも調査する。このような調査を行うことによって、伝達表現という側面から、言語特徴の一端を明らかにすることができると期待される。

ここで示す「伝達」というものは、発話を引用する表現を指す。発言そのものには、動作の遂行といった他の要素が含まれているという考えに基づき、伝達そのものだけでなく他の言語行動にかかわる要素が含まれているかどうかも考察していく。ただし、この考察は日英の伝達に関する比較ではないため、副次的なものとして扱う（5.2 を参照)。

2. 伝達動詞とは

小説などで用いられる伝達動詞（例：「言う」「叫ぶ」等）とは、発言を導く動詞を指している。発言を導くというのは、小説の中で引用符「」や “ ” の前後で用いていることを指す。読者の理解を助ける役割があり、クールタード(1999)では 4 種、西嶋(2000)では 5 種の分類がなされている。それぞれを用例とともに挙げ、クールタード（1999）の分類をもとに、筆者が収集した動詞で説明する：

1）一般的情報動詞　ex.「言う」
例：(cj)「思いうかべただけで、よだれが出てくるわい」と、言った。
(ce) “It makes my mouth water just thinking about it,” he said.

2）遂行動詞　ex.「命令する」
例：「帆をおろせ。」と、スナフキンは命令しました[2]
“Take down the sail,” ordered Snufkin.

3）相互行為構成動詞　ex.「答える」
例：(cj)「うん、ぜんぜん」とチャーリー君は答えた。
(ce) “Never,” answered little Charlie.

4）談話構成説明動詞　ex.「付け加える」
例：(創作)「あ、そうそう。牛乳を買っておいてくれない？」と、男は付け加えました。
(創作). “Oh, could you go buying some milk ?”, he added.

さらに、西嶋（2000）で言及された新たな分類については、筆者が収集した動詞を用例として挙げる。

5）意味不確定動詞　ex.「驚く」
例：(kj) エリンは驚いた。「なんで？おかあさん、ほんとは、闘蛇をお世話するのがいやだったの？」
Elin was surprised. “Why? Don’t you like taking care of the Toda?”[3]

3. 仮説

3.1 仮説

上記のような伝達動詞が文中に出現するかどうかは、各言語によって差異があると推測できる。言語は文化とつながっており、情報を文脈に任せるのか・言葉として表すのかが左右されるからである。その違いから、各言語が物事をどのように表そうとしているのか、言語それぞれが持つ表現効果の特徴を把握できると考える。また、一般情報動詞や遂行動詞とは異なり、直接的に発言を示して

---

[2] なお、本来は「いいました。」と書かれているが、遂行動詞の例示のため改変してある。
[3] この文も、もとは Elin looked at her in surprise. となっている。

いない意味不確定動詞は、どのような場合に出現するのかも考察していく。
そこで、「日本語は言葉の省略が多い。また、英語は言葉の省略が少ない。」という仮説を設定する。

3.2 作業仮説

上記の仮説を具体的に調査できるように、次のような作業仮説をたてる：「日本語には伝達動詞が少ない一方で、英語は伝達動詞が多い。」
この作業仮説を検証するために、次の２点を調査によって明らかにしたい。１つ目は、日本語原作―英語翻訳の分析では、C（日本語伝達動詞なし―英語伝達動詞あり）のケースが多く見られるという結果である。この場合、日本語原作で伝達動詞が使用されていない場面の翻訳では、伝達動詞の付け足しを行うことで自己完結的な文に書き換え、英語話者にとって自然な文に翻訳していることがわかる。２つ目は、英語原作―日本語翻訳の作品でも、Cのケース（英語伝達動詞あり―日本語伝達動詞なし）が多く、それは文脈で判断できるから省略したというように説明できるであろう。この場合は、原作で伝達動詞が使われていても、日本語話者にとって過剰な表現とならないよう削っていると推測することができる。以上の２点を検証する。

4. 調査方法

調査は、それぞれの言語で記された小説から、まず伝達動詞もしくはそれに相当する表現を第１ページ目から 100 個抽出し、次にその箇所が対応する翻訳作品においてどのように表現されているかを調査し、言語間の異同を分析する。これは、西嶋(2000)の調査に基づいている。しかし、日本語とドイツ語ではなく、日本語と英語の比較調査となる。前述２章の１）～４）の動詞に該当しないが、５）のような伝達を示している表現を抽出するのは、各言語の特徴を捉える判断材料となるからである。

4.1 調査の枠組み

まずは調査において、表現の違いを分析するために、小説を材料にした。その理由は、小説であれば、「尋ねた」 “asked” 「答えた」 “answered” のような発言を導入する伝達動詞が頻出するため、各言語の比較が客観的に可能だからである。
そして、英語と日本語を比較対象としたのは、西嶋(2000)において、課題としてドイツ語以外の言語との比較研究を行うことを挙げていたからである。日本語と英語には、同じ場面の描写であっても、すでに述べたように、伝達動詞の有無の差異が存在するという作業仮説を検証する。
発言を導く伝達動詞が出現するかどうかの組み合わせは、論理的に 4 通りある。本来はどちらの言語が原作であるかで、A～D の現れによる特徴の捉え方が変化するが、それについては調査結果を示す際に述べる。以下の例文中に現れる伝達動詞は下線を施すことで示す。

［日本語］　　［英語］
A）伝達動詞あり　　伝達動詞あり
同じ場面において、伝達動詞が両言語とも出現している場合
例）（kj）エリンは、瞬きをして、言った。「ワシュはよく水の中にいるけれど、（以下省略）」
（ke）Elin blinked and said, “I know that washu live near water but（以下省略）”

［日本語］　　［英語］
B）伝達動詞あり　　伝達動詞なし
同じ場面において、伝達動詞が日本語には現れているが、英語ではその対応表現が見つからない場合
例）（kj）母は微笑んで、エリンをゆすった。「そうよ。（以下省略）」　そう言うと、母は、ぎゅっとエリンを抱きしめた。
（ke）Her mother smiled and gently rocked her. “That’s right.（中略）” She hugged Elin close.

［日本語］　　［英語］
C）伝達動詞なし　　伝達動詞あり
Bの逆である。英語には伝達動詞が現れているが、日本語には見られない場合。
例）（cj）「チャーリーに、あの頭のおかしいインドの王子さまのことを話してあげたら」と、ジョセフィーンばあちゃん。「きっと聞きたいだろうさ」
（ce）“Tell Charlie about that crazy Indian prince,” said Grandma Josephine. “He’d like to hear that.”

［日本語］　　［英語］
D）伝達動詞なし　　伝達動詞なし
両言語とも伝達動詞を用いずに発言引用を行っている場合。
例）（kj）母は笑った。「まあ、見ててごらん」
（ke）Her mother laughed. “Watch and see.”

上記のように、小説では、発言引用（「　」や“　”）の前後に伝達動詞が無い場面がある。これは、伝達動詞を省略した場合、間接的に伝達を示す意味不確定動詞が現れる場合、そして、発言引用が突然行われるもの(伝達動詞がないもの)に大きく分けられる。本研究では、伝達表現が存在しているか否かを明らかにしたいため、伝達動詞を省略したものと意味不確定動詞が用いられているものを[伝達動詞無し]とカウントする。

4.2 使用するテクスト

調査に使用する小説は以下の通りである。なお、日本語と英語以外の第三言語を原作とした作品は、日本語と英語に翻訳されたものを調査に使用している。今回は、読者層がジュブナイルである作品を対象とした。語彙力が未熟である若者に対して用いられる表現は、一般向けの小説より理解が容易なものであり、伝達表現も同様にわかりやすいものを使うと考えられる。「言う」— “say” のような典型的な表現であれば、対応してどちらも伝達動詞を用いているのか、省略しているのかの比較を行いやすいと考えたためである。なお、用例を引用した作品は（　）に略号を用いて表記する：

日本語作品とその英訳：

筒井康隆：『時をかける少女』（tsj）
　英訳 *The Girl Who Leapt Through Time*（tse）
上橋菜穂子：『獣の奏者』（kj）
　英訳 *The Beast Player*（ke）

英語作品とその和訳：

Roald Dahl：*Charlie and the Chocolate Factory*（ce）
　和訳『チョコレート工場の秘密』（cj）
Jacqueline Wilson：*The Story of Tracy Beaker*（tbe）
　和訳『トレイシー・ビーカー物語 1 おとぎ話はだいきらい』（tbj）

第三言語の作品の日英訳：

Tove Marika Jansson：*Kometjakten*（フィンランド語）
　和訳『ムーミン谷の彗星』（mj）
　英訳 *Comet in Moominland*（me）
Saint-Exupéry： *Le Petit Prince*（フランス語）
　和訳『星の王子さま』（ppj）
　英訳 *The Little Prince*（ppe）

日本語原作とその英訳作品が 2 編、英語原作とその日本語訳作品が 2 編、そして第三言語とその日本語訳作品・英訳作品が 2 編である。第三言語の小説を用いるのは、片方の言語から他方の言語への翻訳では起点言語の文法・表現から影響を受けてしまう可能性があるため、第三言語の作品を共通する意味情報と位置づけることができるからである。

4.3 調査対象としての伝達動詞の定義

前述の分類の通り、調査では意味不確定動詞は伝達動詞に含まれないものとして扱う。つまり、発言の引用の前後に意味不確定動詞が見られた場合、それは

伝達動詞ではないものとみなし、[伝達動詞無し]にカウントする。意味不確定動詞の大半はコンテクストに関する情報を提供しているが、その際は伝達動詞を用いない別の伝達表現方法として捉えることにする。そのような例の詳細については後述する(5.3)。

5. 結果

全ての結果を表にまとめると次の表1のようになる。

(表1)

	時をかける少女	獣の奏者	チャーリー	トレイシー	ムーミン谷の彗星	星の王子さま
A) 日有—英有	43/100	42/100	62/100	78/100	72/100	75/100
B) 日有—英無	7/100	17/100	0/100	2/100	2/100	8/100
C) 日無—英有	43/100	14/100	38/100	14/100	24/100	14/100
D) 日無—英無	5/100	27/100	0/100	6/100	2/100	3/100

この数値は検出した動詞100個がどの項目に該当するかを表している。以後、作品ごとに結果とそこから得られた情報を述べることにする。なお、表のタイトル表記は『チョコレート工場の秘密』は［チャーリー］、『トレイシー・ビーカー物語』は［トレイシー］と略してある。

5.1 日本語原作

日本語原作と英語訳作品の伝達動詞の有無の結果は次の表2のようになる。

(表2)

	時をかける少女	獣の奏者
A) 日有—英有	43/100	42/100
B) 日有—英無	7/100	17/100
C) 日無—英有	43/100	14/100
D) 日無—英無	5/100	27/100

日本語と英語どちらも伝達動詞が生じているAのケースは、出現頻度が後述の英語原作(5.2)の結果と多少異なるが、100個中42個と43個、つまり4割を占めているため(5.1)と結果は大きくは変わらないと考えていいだろう。そして、Cのケースについてであるが、『時をかける少女』と『獣の奏者』で数値にかなり差があるものの、日本語原作に用いられていない伝達動詞が、英語訳作品では付け足されていることが伺える。各作品は書かれた年代と作者も異なっているためCの数値にばらつきがあることについての調査が困難であるが、[日本語から英語に翻訳する際に、伝達動詞を付加している]というには十分であると言える。しかし、原作には現れているのに、英語では用いられていない、正反対のBのケースが(5.1)の結果よりも比較的多い。これについても、6章で考察を行う(6.4)。Dの意味不確定動詞も同様にそこで議論する(6.3)。

5.2 英語原作

英語原作と日本語訳作品においての、伝達動詞の有無の結果は表 3 のとおりである。

(表 3)

	チャーリー	トレイシー
A) 日有—英有	62/100	78/100
B) 日有—英無	0/100	2/100
C) 日無—英有	38/100	14/100
D) 日無—英無	0/100	6/100

出現回数に差は見られるが、英語と日本語どちらも伝達動詞が用いられている A のケースが 6 割から 8 割程度を占めていることがわかる。そして、注目したい点は、英語原作では伝達動詞が用いられているが、日本語翻訳の際には用いられていない C のケースが、[チャーリー] では 100 個中 38 個、[トレイシー] では 100 個中 14 個とそれぞれ個数にばらつきがあるものの、日本語への翻訳の際、大半が訳出されていないことがわかる。訳者によって翻訳の仕方に違いが出る可能性を踏まえたとしても、日本語への翻訳では、明らかに伝達動詞の省略がおきている。この結果は、作業仮説に沿った結果と言える。

原作にも英語訳にも伝達動詞が存在せず、意味不確定動詞が用いられるケース D は、数が少なかったが、6 章でどのような場合に生じるかの考察を行う(6.3)。また仮説では触れなかった B のケースも同様に 6 章で論じる(6.4)。

5.3 第三言語原作

次の表 4 は、第三言語原作から英語と日本語それぞれに翻訳されたものの調査結果である。

(表 4)

	ムーミン谷の彗星	星の王子さま
A) 日有—英有	72/100	75/100
B) 日有—英無	2/100	8/100
C) 日無—英有	24/100	14/100
D) 日無—英無	2/100	3/100

この表からわかる通り、A のケースが 72 個と 75 個、C ケースが 24 個と 14 個ということから、5.1 と 5.2 と同様に、日本語と英語どちらも伝達動詞を用いているケース A の数値が最も高く、次に日本語訳では伝達動詞が用いられないケース C の数値が高いことがわかる。そして、比較対象言語同士の影響を避けた、つまり第三言語を用いた結果からも、日本語は英語と比較して伝達動詞を用いない傾向的特徴が確認できたと言える。

5.4 伝達動詞の種類

下の表 5 では、使用されている伝達動詞と意味不確定動詞、そして動詞の省略の 6 つに分類した。

（表 5）

	時をかける少女		獣の奏者		チャーリー		トレイシー		ムーミン		星の王子さま	
	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語	英語	日本語
1 一般情報動詞	78	47	45	43	91	38	81	73	83	65	62	64
2 遂行動詞	0	1	0	0	1	0	1	0	4	1	1	0
3 相互行為構成動詞	6	3	9	6	5	2	14	3	2	11	15	15
4 構成談話説明動詞	2	0	3	4	2	3	1	0	0	0	11	5
5 意味不確定動詞	9	22	35	39	1	18	2	9	7	4	2	4
6 動詞の省略	5	27	8	8	0	39	1	15	4	19	9	12

数字は伝達動詞の個数を表しており、１つの作品に付き計 100 個である。この伝達動詞の種類による差異も、日英の言語特徴の差異のあらわれといえる。伝達動詞の分布、つまり本研究では１）～４）の動詞の分布を日本語と英語で比較する。

5.4.1 日本語原作

（表 6）

	時をかける少女		獣の奏者	
	英語	日本語	英語	日本語
1 一般情報動詞	78	47	45	43
2 遂行動詞	0	1	0	0
3 相互行為構成動詞	6	3	9	6
4 構成談話説明動詞	2	0	3	4
5 意味不確定動詞	9	22	35	39
6 動詞の省略	5	27	8	8

5.4.2 英語原作

（表 7）

	チャーリー		トレイシー	
	英語	日本語	英語	日本語
1 一般情報動詞	91	38	81	73
2 遂行動詞	1	0	1	0
3 相互行為構成動詞	5	2	14	3
4 構成談話説明動詞	2	3	1	0
5 意味不確定動詞	1	18	2	9
6 動詞の省略	0	39	1	15

5.4.3 第三原語原作

（表 8）

	ムーミン		星の王子さま	
	英語	日本語	英語	日本語
1 一般情報動詞	83	65	62	64
2 遂行動詞	4	1	1	0
3 相互行為構成動詞	2	11	15	15
4 構成談話説明動詞	0	0	11	5
5 意味不確定動詞	7	4	2	4
6 動詞の省略	4	19	9	12

全てにおいて共通しているのは、一般情報動詞の分布が、日本語より英語の方が多いということである。このことから、一般情報動詞は伝達動詞の中で最もコンテキストに影響されない、単純に伝達のみを行う動詞であるということがわ

かる。意味不確定動詞については、第三語作品を除いて、日本語のほうが多く用いられていることから、伝達動詞をそのまま日本語に翻訳するのではなく、描写等を含める、あるいは「声をあげる」などの発言にまつわる熟語に置き換えていたり、熟語を簡潔な動詞に翻訳しているケースが多いことが伺える。

5.5 結果のまとめ

5章の結果から、日本語は英語よりも伝達動詞を用いない傾向があることがわかる。そのため、日本語原作で伝達動詞が出現しない場合は、英語翻訳で伝達動詞を付加し、また、英語原作で用いている伝達動詞を日本語訳では省くという作業を、それぞれ行っているといえる。ホール(1979)によれば、日本語は文脈依存度が高い、いわゆる高コンテキスト文化であり、他方、アメリカやイギリスなどの英語圏は、文脈への依存度が低い、いわゆる低コンテキスト文化である。このような文化的な違いが、上記の調査結果に影響していると考えられる。ホール(1979)では、コンテキストを論じるために異なる文化とコンテキストのかかわりを、法廷における法律の機能を観察することによって比較研究しており、その中で日米の司法制度の比較がなされている。アメリカの法廷では、「コンテキストとなっている背景のデータを一切取り除いた既成事実だけが証拠として認められる」一方で (p. 124)、日本では「犯罪をコンテキストの中においている」のである (p. 128)。以上のように、日本語と英語で動詞の出現に違いが見られるのは、根本の文化が異なっていることが起因して、コンテキストを多く含むか否かのズレが生じるのである。[4]

また、動詞の分類ごとの分布から、日本語の方が一般情報動詞以外の動詞や、省略・意味不確定動詞といった情景描写を付帯できる動詞に振り分けられているため、伝達に加えて読み手に他の情報を悟らせるような表現を英語より多く用いていると言える。

6. 考察

6.1 結果を踏まえて

5章で述べた通り、日本語原作とその英訳作品を比較した結果、原作にはない伝達動詞が付け足されているケースが確認された。一方で、英語原作とその日本語訳作品では、原作で表出している伝達動詞が翻訳されていないケースもあった。そして第三言語の原作から、日本語と英語それぞれの翻訳作品を比較しても、同様に伝達動詞の省略が日本語では多く行われていることが確認できる結果となった。これにより、仮説は否定はされず、英語は低コンテキスト文化の影響から言語の省略は日本語と比べて生じず、日本語は高コンテキスト文化によって言語を省略しやすいと言える。次節では、仮説どおりの C ケースはどのような場合に生じるのかの検討を行う。

一方で、仮説どおりではない反例も見られるため、仮説とはそぐわない場合は

---

[4] エドワード・ホール『文化を超えて』一部抜粋・文末変更

どのようにして起こるのかについても考察を行うことにする。例えば、意味不確定動詞がどのような場合に出現するのかを考察する(6.3)。また、日本語原作には伝達動詞が表記されているのに、英訳作品には対応する表現が出現しないBの考察も行う(6.4)。6章は主にこれら3つを考察する。

6.2 Cの考察

日本語では伝達動詞を用いておらず、英語では用いているCのケースは、いくつかの分類ができる。以下の例示から分かる通り、表記上、つまり文法における違いが多い。これから記載するものはあくまで例示であり、Cのケース全てを網羅しているわけではないことを予め断っておく。

ア) 日本語には伝達動詞が見受けられないが、英語には誰が発言したのか示した（引用記号）後に、発言動詞＋主語が置かれる場合：

イ)

(mj) 「目をあけたままで、きみはもぐれる？」

(me) "(省略), Sniff, can you dive with your eyes open?" asked Moomintroll.

イ) 同じ場面で、日本語では1セットの引用記号で発言内容を示しているのに対し、英語では2セットで、[発言＋伝達動詞＋主語＋発言] という形をとる場合：

(mj) 「ほんとのか。中へもぐりこむあなのあいてるやつ？」

(me) "A real cave," asked Moomintroll, "with a hole to creep in through, and rocky walls, and a sandy floor?"

ウ) 同じ場面で、日本語では1セットの引用記号で発言内容を示しているのに対し、英語では一度文を区切り、[発言＋主語＋伝達動詞. 発言] という形を取る場合：

(mj) 「ぼくは竹馬であるいたもの。(省略)」

(me) "I walked on stilts," Snufkin answered. "They were wonderful for climbing, and I don't know what I should have done without them when the earth that had been asleep suddenly woke up! (省略)."

エ) 日本語は意味不確定動詞を用いているのに対し、英語が伝達動詞を用いている場合（意味不確定動詞は波線）：

(mj) 「なにか、こわいこと？」スニフがそっといって、じゃこうねずみを見つめました。

(me) "Something awful?" asked Sniff, pulling his nightshirt tighter around him.

以上が今回の調査で見受けられた C の具体的事例である。どの作品においても、C の中で圧倒的に多かったのがア）とイ）の形であった。もとの言語あるいは翻訳関係なしに、英語では引用の際、伝達動詞と主語を用いていることが比較的多いということがわかる。つまり、英語は、発言をメタコミュニケーション的に言語行為として特徴づける習慣があると言える。

エ）の形は少数ではあるが、伝達動詞ではなく意味不確定動詞を選んでいることに意味が有ると考え、紹介という形で掲載しておく。

6.3 意味不確定動詞の共通点（D の考察）

次に、意味不確定動詞が使われる場面の特徴をまとめていきたい。:

い）見る/look を用いる

(tbe) I gave her this long look. "You're single, Elain. And I bet you're suitable. So why don't you foster me, eh? Then I could be your foster child."

(tbj) あたしは、エレインをじいっと見た。「エレインは独身だよね。それに、あたしにぴったりだと思う。そうだ、あたしをひきとってよ、ね？」

(mj) スナフキンはスニフをじろじろ見ました。「まあね。だけど、しっぽはだめだな。（省略）」

(kj) 母は、エリンを見つめた。「……なぜ、そう思ったの？」

「見る」を用いている場面では、動作主が見ている対象に対して何らかの感情・考えを伴っている故に、その内容を伝えるという間接的な提示として用いられていると解釈する。

(tbe) "Yes, that's the way people usually draw angels." She looked at Louise. "So is this the way you imagine your mom and your granny?"

これは、話者が当初話していた者とは別の人物に話しかけている場面である。視線を変える描写によって、「話しかけている」ことを間接的に示している。

ろ）笑う

(kj) 母は笑った。「まあ、見ててごらん」

(ke) Her mother laughed. "Watch and see."

(tbe) She burst out laughing then. "No one can stay supercool when you're around, Tracy," she said.

(tbj) そこで、エレインはこらえきれずにふきだした。「あなたといると、だれも超冷静でなんていられないわよ、トレイシー。（省略）」エレインはいった。

『獣の奏者』や『トレイシー・ビーカー』に多く見られたのが、「笑う・微笑む」の描写の後に発言引用が起こるケースである。楽しい・面白いといった感情を付帯させながら、会話を展開させるときに使われている。直接的な伝達動詞ではなく笑う・微笑むといったような意味不確定動詞を使用しているのは、ただ発言を描写するのではなく、感情の描写に重点を置いているためだと考えられる。以下の場面では、夢中になってごちそうを頬張る娘の姿を見て微笑ましく思った母親が、さらに美味しい食べ方を提示しようと発言している場面である。「笑う」 "laugh" を用いることで、娘の姿を微笑ましく思っていることを、発言の描写よりも優先させたいことが伺える。

(kj) 「おいしいかい？」エリンが夢中で猪肉にかぶりつきながら、うなずくのを見て、母は嬉しそうに笑った。「その汁をご飯にかけてごらん」
(ke) "It's good, is it?" her mother asked. When Elin nodded, she laughed. "Try pouring the juice over the rice."

意味不確定動詞は発言自体を伝達しているわけではないが、その動作の次に発言が起こるであろうという読み手側の推測によって、間接的な発言引用が可能だといえる。

また、以下の例は全て『獣の奏者』のみに出現した、[意味不確定動詞と感情の付帯]を含む発言描写である。他の作品には見られないものであったため、筆者特有の伝達表現である可能性も考えられるが、参考として挙げておく。

は) (顔を) ゆがめる：同情
(kj) ジョウンは顔を<u>ゆがめた</u>。「.....かわいそうになあ。こんな幼い女の子が.....
(ke) Joeun <u>grimaced</u> at the sight. "...The poor girl. She's such a little thing..."

に) うなずく/ (首を) 振る：肯定/否定
(kj) 若者は、<u>うなずいた</u>。「おそらく、大丈夫であろうと思います」
(ke) The youth <u>nodded</u>. "Yes, I believe we don't have to worry about that."
(kj) 若者は<u>首をふった</u>。「ナソンが跡を辿っておりますが、(省略)」
(ke) The young scout <u>shook his head</u>. "Nahson is following her trail now, (省略)"

ほ) (目を) 細める：疑念
(kj) 監察官は<u>目を細めた</u>。「わずか数時間で、そのような変化が起きたというのか。なぜだ？」
(ke) The inspector's eyes <u>narrowed</u>. "You mean this change occurred within

the space of just a few hours? Why?"

へ）鼻で笑う：嘲笑、嘲り
(kj) やがて、鼻で笑った。「その必要はあるまい。……見ろ。」
(ke) He snorted. "That won't be necessary...Look."

以上が、伝達動詞ではなく意味不確定動詞が用いられている主な表現である。また、意味不確定動詞には、動作だけでなく動作主の感情も伴っている可能性が高い。このことについては、今回の調査だけでは断定するのは難しいが、『獣の奏者』『トレイシー・ビーカー物語』で多く見られたという点から、後の調査によっては、証拠を以て示すことが可能だろう。まとめると、意味不確定動詞は、発言を行う者の視点変化が行われる際、あるいは、発言を行う者の感情を示したい場合に出現すると考えられる。

6.4 Bの考察

「大きな声をあげる」"make a noisy voice" のように、伝達動詞ではなく、熟語であったり、声といったような発言描写を名詞で示す形を今回は伝達動詞とはしなかった。つまり、伝達動詞ではないが伝達を示す表現が存在するということである。ここでのどちらも伝達を示す表現というのは、「声」という言葉が用いられるものか、会話を続けるといったような、発言の継続を示す表現を用いていることを指す。そのため、日本語には伝達動詞が用いられてはいないが、英語には用いられているという形式上の結果が出るケースがあった。

前述とは異なって、日本語の作品では伝達動詞が使われているが、英語では "voice" といった発言の描写を連想できる名詞すら使っていないケースの傾向を見る。

(kj) 母は微笑んで、エリンをゆすった。「そうよ。(省略)」　そう言うと、母は、ぎゅっとエリンを抱きしめた。
(ke) Her mother smiled and gently rocked her. "That's right. (省略)"　She hugged Elin close.

(tj) トイレットで手を洗いながら、吾朗は一夫を見あげていった。「芳山くんというのは、やさしくてかわいいけど、少し母性愛過多なんじゃないか?」
(te) Goro looked over at Kazuo. "Kazuko's cute, and she's nice, too. But she can be a little overbearing at times, can't she?"

以上の意味不確定動詞「抱きしめる」「見上げる（見る）」といったように、発言よりも、その動作に焦点を置きたい際に起こると考えられる。

7. おわりに

本研究の中で課題が残る箇所として、分析材料の選定に時代の差が大きく出てしまったため、必ずしも有意とはいえない結果が出た可能性があることと、動詞の分類に不明瞭さが生じてしまったことである。小説の選定に関しては、今後、時代が現代に依っている作品を選ぶことと、検証数を増やすことで解決できると考える。また、動詞の分類に関しては、例えば "answer" という語の翻訳が「返事をする」という場合、日本語の動詞を、「返事をする」をひとつの動作として捉えて一般情報動詞とするのか、「する」のみに着目して意味不確定動詞とするのか、判断が難しい。本研究では調査の分類基準として文法面に重点を置き、意味不確定動詞として捉えた。しかし結果として、どちらも伝達を示しているということの検証であるため、またその場面を伝達しているものと見なす行程が生じるため余計な手間がかかっているのではないかという懸念が残った。文法面で統一するのか、あるいは語の内容を考慮して調査するのかを、今後の研究の課題としなければならないだろう。

使用テクスト

— 上橋菜穂子：『獣の奏者』．講談社文庫，2006.
— Uehashi, Naoko：*The Beast Player*. (Cathy Hirano 訳), 2018.
— Wilson, Jacqueline：*The Story of Tracy Beaker*. Corgi, 1991.
— ジャクリーン・ウィルソン：『トレイシー・ビーカー物語 1 おとぎ話はだいきらい』（稲岡和美訳）. 偕成社，2010.
— 川端康成：『雪国』．新潮文庫，1992.
— Yasunari Kawabata：*Snow Country*. (Edward George Seidensticker 訳). C. E. Tuttle, 1956.
— Saint-Exupéry：*Le Petit Prince*. Éditions Gallimard, 1946.
— Saint-Exupéry：*The Little Prince*. Reynal & Hitchcock, 1943.
— サン＝テグジュペリ：『星の王子さま』．（内藤濯訳）．岩波書店，1957.
— 筒井康隆：『時をかける少女』角川，1967.
— Jansson, Tove Marika：*Muumipeikko ja pyrstötähti*. WSOY, 1946.
— トーベ・ヤンソン：『ムーミン谷の彗星』（下村隆一訳）．講談社，1981.
— Jansson, Tove Marika：*Comet in Moominland*. (Thomas Warburt 訳). Emest Benn Ltd., 1959
— Tsutsui, Yasutaka：*The Girl Who Leapt Through Time*. (David James Karashima 訳). Alma Books, 2011.
— Dahl, Roald：*Charlie and the Chocolate Factory*. Alfred A. Knopf, Inc., 1964.
— ロアルド・ダール：『チョコレート工場の秘密』（柳瀬尚紀訳）．評論社，2005.

参考文献

— 安藤貞雄：『英語の論理・日本語の論理　対照言語学的研究』，大修館書店，1986.

— 池上嘉彦：『「日本語論」への招待』，講談社，2000.

— ダニエル・ヴァンダーヴェーケン：『発話行為理論の原理』(久保進訳注)，松柏社，1995.

— ジョーン・L・オースティン：『言語と行為』(坂本百大訳)，大修館書店，1978.

— マルコム・クールタード：『談話分析を学ぶ人のために』(吉村・貫井・鎌田訳)，世界思想社，1999［Malcolm Coulthard：*An Introduction to Discourse Analysis*. 2nd Edition, Longman, 1985].

— 西嶋義憲：「伝達動詞の日独対照の試み」『文体論研究』第46号，2000，pp. 42-60.

— エドワード・ホール：『文化を超えて』(岩田慶治訳)，TBSブリタニカ，1979.